

Mitsuo Ochi

越智光夫

第12代広島大学学長。1952年8月6日、愛媛県生まれ。広島大学医学部卒業後、整形外科に入局。43歳で島根医科大学教授を務めたのち、2002年に広島大学大学院歯医学総合研究科教授に就任。2015年には関節軟骨研究とその臨床応用が評価され、紫綬褒章を受章した。2015年より現職。

対談

広島大学長が問う、 核の非対称と「宗教ゼロ」 時代の「日本の選択」

エマニユエル・トッド

Emmanuel Todd

エマニユエル・トッド、自身を語る

越智 このたびは、第99回広島大学講演会において、世界的な知の探究者であるエマニユエル・トッド先生と、こうして直接対話の機会を持つことを、心より光榮に存じます。

本来であれば2024年、本学が創立75周年、前身校の歴史を含めて150年という大きな節目を迎えた年に、特別ゲストとしてお迎えする予定でございました。しかしながら、ご体調のご事情により、その折はご来校が叶いませんでした。

その後、トッド先生ご本人から「必ず広島大学に戻り、講演と対話の機会を持ちたい」とのお申し出を頂戴し、本日の開催が実現したことに、深い感慨を覚えております。

トッド先生は、日本がこれからいかにして平和を守り、自立した国家として歩むべきかという問いに、強い関心を寄せておられます。「アメリカが将来にわたって日本を守り続けるという前提は、果たして揺るぎないのか」という問題意識から、日本はより主体的に安全保障を考えるべきではないか。さらには核武装という選択肢も、理論的には議論の俎上に載せる必要があるのではないか——そのような挑発的とも言える問いを提示されています。

私自身は、広島に生き、広島大学に身を置く者として、また個人としても、核保には明確



に反対の立場です。しかし同時に、立場の違いを封じるのではなく、互いの意見を率直にぶつけ合い、対話を通じて思索を深めることこそが、大学という知の共同体に課せられた最も重要な使命であると考えています。

現代社会では、SNSに象徴される「フィルターバブル」によって、私たちは往々にして、自らの考えを補強する情報だけに囲まれ、異なる意見に触れる機会を失いがちです。しかし、それでは社会の成熟も、知の進歩も望めません。

ヘーゲルが説いた「止揚（アウフヘーベン）」が示すように、異なる立場が衝突し、対話を重ねることこそ、私たちはより高次の理解へと到達することができます。直線ではなく、螺旋を描くように思索を深めていく姿勢こそが、いま私たちに強く求められているのではないのでしょうか。

本日は、トッド先生の率直な問題提起に真摯に耳を傾けながら、それぞれが自分自身の内側で「対話」を行う場としていただきたいと思います。

私たちはどう行動すべきなのか。異なる意見を持つ他者と、いかに思考をすり合わせ、社会を形作っていくのか。本日の議論が、その問いを考える一つの契機となれば幸いです。

まずは原点に立ち返る、きわめて基本的な問いからお伺いします。トッド先生、あなたはどのような子どもだったのでしょうか。

トッド とても優しい子どもでした。そして同時に、非常に怒りっぽい子どもでもありました。現在の私は年老っていますが、根底にある優しさは変わりません。

越智 先生は優しさと共にある種の事柄には強く怒りを持つ方だと思われれます。先生の研究の根底には理不尽な権力や支配的な思想に対する、揺るぎない「抵抗の精神」が一貫して流れているように感じています。

ポール・ニザンを祖父に、クロード・レヴィ・ストロースを遠縁に持つという、きわめて稀有な知的環境のもとでお育ちになりましたが、その家族的背景は、先生の思考形成にどのような影響を与えたのでしょうか。

トッド おっしゃるとおり、私はヨーロッパでも「知的名門」といわれるような家系に生まれました。しかし政治的には「左翼」に属しており、その環境で学んだ最も大切なことは「支配的な思想に対して自由でいられること」です。

この自由さは私個人の勇氣によるものではなく、家族が与えてくれた「知的免疫」のようなものです。世間のイデオロギーに縛られず、批判的にものを見る態度を自然に身につけること

ができました。

さらに付け加えれば、今日では高学歴層が増加し、「エリート」への反感が、多くの人々の間で強まっています。多くの国で、「高学歴層の人たちは自分たちを軽蔑しているのではないか」と感じる人が増えているのです。

今は何よりも、「現実の仕事」へのリスペクトが必要

越智 アメリカでは、大学への交付金削減も進んでいますね。知識階級に対する不信感が社会の分断を深めているように見えます。

トッド そのとおりです。社会が健全に機能するためには、人文科学だけでなく、ものづくりや第一次産業、エンジニアリングなど、メチエ（現実の仕事）を担う人々が尊重されることが欠かせません。

ただし私自身も、私の家族も、そして私の子どもたちも、決してその分野には属していません。そういう意味では、理想と現実と距離があることも理解しています。

越智 先生は、直系家族、平等主義核家族といった家族類型論によって、社会構造を読み解く独自の分析で広く知られています。その視点から見ても、ご自身はどの家族類型の影響を最も強く受けているとお考えでしょうか。

トッド 私の家族は非常に複雑です。祖先はブルターニュ、西フランス、イングランドに広がっていますが、核となるのはユダヤ系です。ただし、家族システムは個々の家系ではなく、大きな「集団単位」で見なければ意味がありません。

私はパリで生まれ育ちました。パリ盆地に広がる地域は、フランスの大部分を占める「平等主義核家族」文化圏です。ですので、私自身もそのメンタリテイの影響を自然に受けています。

「ニヒリズムに覆われる世界」と「美」の希望

越智 先生の著書では、「ニヒリズムに支配された西洋の敗北」という、きわめて強い表現が用いられています。民主主義が揺らぎつつある現在、世界は今後、どの方向へ向かっていくとお考えでしょうか。

トッド 世界全体がニヒリズムに沈むわけではありません。むしろ「多様な国家が共存する時代」へ向かっています。

ロシアや中国のような権威主義国家もあれば、リベラルな民主主義国家もある。そのような多極的世界が形成されていくでしょう。

また、インターネットは世界を結ぶ力を持ち続けるものの、世界構造そのものを決定づけるわけではないと思います。

さらに長期的には、人口が減ることで戦争の動機が弱まり、比較的穏やかな世界が訪れる可能性もあります。

ただし危険なのは「衰退しつつある大国」です。力を失いかけた国家は不安定になりやすく、世界の火種となるのです。

越智 日本では、先生の著作が数多くの読者に支持され、ベストセラーとなっています。ルス・ベネディクトの『菊と刀』のように外国人の著した日本論に対する日本人の関心の高さもあります。それ以上に、先生の分析が深く受け入れられている理由を、どのようにお考えでしょうか。

トッド 理由は非常に明快です。日本が「直系家族文化」を持つ国だからです。直系家族では、家族が社会の基礎単位であり、個人の行動を強く規定します。

だから私の家族構造の分析は、日本では「ごく当たり前のこと」として受け取られるのです。一方でフランスは「平等主義核家族」の文化で、個人の自由が最上位の価値です。しかしその自由は「自由であれ」という強制を生み、逆説的に不自由を抱える構造もあります。

この違いが、日本とフランスで、私の研究の受け入れられ方が異なる大きな理由です。

越智 「日本とドイツの文化が似ている」という分析もされていますね。

トッド ええ。日本とドイツは、規律や秩序への敬意を共有しています。家族構造も近く、似た精神的基盤があります。

ただし、日本人にはユーモアの感覚がありますが、ドイツでは必ずしもそうではないという違いはありますが（笑）。

越智 先生は「日本の美しさ」について語られています。移民や価値観の変動によって、それは失われるのでしょうか。

トッド 私のいう「美しさ」とは風景ではなく、人間が「世界を美しいと感じる感性」です。日本の最大の問題はニヒリズムではなく、「完璧さの過剰」です。完璧すぎる社会は脆く、余白や逸脱が受け入れられない。だからこそ私は「不完全さの再学習」を提案します。江戸時代には、秩序の中に多くの逸脱がありました。日本人はそこから学び直すべきだと考えています。

核武装は、それでもなお「必要」なのか？

越智 ここからは、きわめて重いテーマである核兵器について伺います。先生は、日本の核武装を理論的に容認する立場を取られていますが、その根拠はどこにあるのでしょうか。

トッド 核保有国が増えればリスクは高まります。しかし、それ以上に重要なのは「非対称性」です。

片方の国だけが核を持ち、もう一方が持たない状態——これは1945年のアメリカと日本の状況ですが——大変危険です。

私は、恐怖の均衡の方が非対称よりは「まし」だと考えています。

核兵器は既に存在しており、私たちは「二つの悪い選択肢」の間で「どちらがより悪くないか」を選ぶべきだろうと考えています。

越智 先生のお考えは理解できます。しかし私は、広島に生きる市民として、また原爆の記憶と向き合い続けてきた大学の長として、倫理的にも心理的にも、核武装を受け入れることはきわめて困難です。銃が氾濫する社会よりも、銃を持たない社会の方が安全であるように、核が増えれば増えるほど、世界はより不安定になると私は考えています。

それでもなお、私たちは立場の違いを超え、対話によって理解を深める努力を続けなければなりません。大学とは、そのための「理性的対話の場」であるべきだということを、本日の議論を通じて改めて実感しました。

最後に一つ、問いを投げかけさせてください。もし先生が核廃絶を本気で推進する立場に立つとすれば、どのような道筋を描かれるでしょうか。

トッド 私は高齢で、不可能なことを考える時間は残されていません。したがって、その問いには答えないことにしています。人生は短いのです。

越智 本日の対話を通じ、私は改めて、平和とは固定された理想ではなく、絶えず問い直され、更新され続ける「動的な思索の営み」なのだと思えました。

広島大学はこれからも世界の知と良心を結びつけ、対話を重ねながら、持続可能な平和を主体的に創り出す人材を育ててまいります。

その貴重な思索の機会を与えてくださったトッド先生に、心より感謝申し上げます。本日は誠にありがとうございました。

※本対談は、2025年10月18日に第99回広島大学講演会で行われました。